

対談

アメリカ村の過去・現在・未来

日限萬里子[アーバン・プロモーション・プロデューサー]VS大塚 融[数寄者研究家]

1993年9月7日 於：ギャラリー ラ・フェニーチェ

原点はサーフィン

日限 アメリカ村という名前は誰がどこで言い出したのかはわかりませんが、サーフィンというスポーツが一つの原点です。和歌山の海に夕方車で出て行って、早朝の波に乗って、また夕方にドレドレになって戻ってきて、というようなグループが私のカフェなんか集まりだしてきて、輪ができた。そのうちハワイやカリフォルニアに行くようになって、向こうでサーフボードなんかを持って帰ってきて、古いボードを私のカフェに置いて、誰か来たら売ってくれへんか、なんてね。

向こうに行ってTシャツとかサーフボードを持ち帰って売ったら、旅

費ぐらいは出るわけですよ。それをその辺の空き事務所とかに置いて商売しだしたのが原点です。

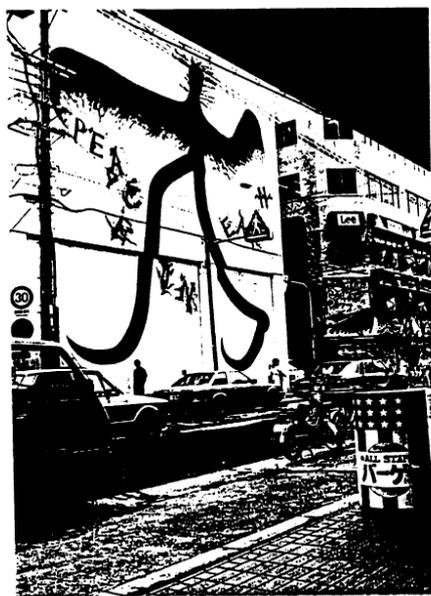
その頃は輸入品といえばおじさんやおばさんが着るようなヨーロッパの高級なものが基本で、アメリカのTシャツなんかを売る店はなかったんです。サーフボードもスポーツ用品店にも置いていなかった時代で。

火をつけたのはサーフィンというスポーツで、そこから音楽、ファッションと広まっていった。

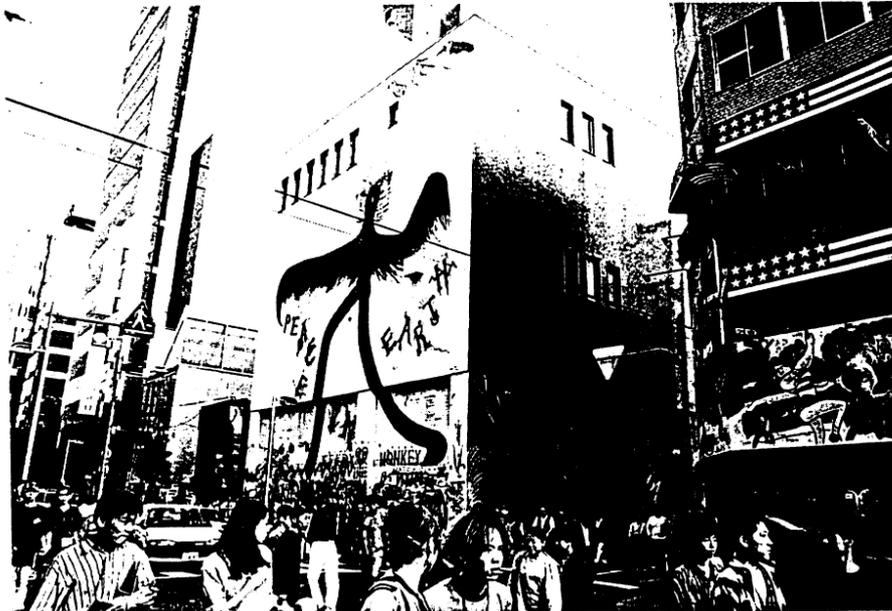
その辺の原点からいえば、アメリカ村というのは、物を売るだけではなくて、精神的な面でもアメリカのフロンティア精神というか、若い人達がチャレンジできる所だったんですよ。

それから、ミナミというのは商売人の子が多いから、見よう見まねで親から資本金を借りてやりだすというところがありました。

私はミナミで生まれて育った人間で、心斎橋を通過して学校に行っていました。学校を卒業して遊びがてら世界一周でもしようかと思っていたある日、夜遅く車で周防町を通過して、コーヒーの飲めるかっこいい喫茶店はないかと捜していたんです。でも、そんな時間にはお酒を飲む店しか開いてない。その時、三角公園を曲がった所に、貸事務所という貼り紙が目に入ってきて、世界一周はいつでもできる、夜遅くまでコーヒーの飲める店を作ろうと思ったのです。それが最初に作ったループとい



ウォールペインティング 上・10年前 右・現在



うカフェ。1969年の7月のことです。

泉州は大阪のウエストコースト

大塚 僕が当初取材していた時から再三聞いていた通り、やはり日限さん中心なんですよ。ループにみんなが大変慕っている女の人がいるということ、若い連中が言っていましたよ。

ミナミという所は南海・近鉄沿線、泉州地方、奈良地方出身の人間が多い。泉州地方というのは広々とした農業地域なんですよ。そこでは太陽がさんさんと照っていて、海に面しているために大変視覚的に明るい。そこがアメリカ西海岸の風土に非常に似ている。だからウエストコーストのファッションにみんな惹きつけられるわけですよ。

それから、都会と違って3世代で住んでいるから、孫が突出した服装をするとおじいさんがクレームをつけるっていうんです。だから抑制のきいたマイルドな色彩になってくる。古着ファッションはそういう3世代的構造からも生まれてきたんじゃないかと思っている。

日限 それと、新しい服を着ても、海に行つて帰つてくると、古着のよ

うにどろどろになっちゃうんですね。サーフィンをしていたのは一部の人でしたから、それを若い人が見たらカッコいいということになって、いざ買おうとしたら、売ってなかったんですね。それが一つの古着の流行になりましたね。

アメリカ村は自分たちがやりたいことを自由にできるエリア。大阪っていうのは文化が古いから、道頓堀やったら道頓堀らしさとか、土地に対する固定観念があるんですよ。それぞれ古くから住んでる人間にとっては入り込めない、色は変えられない。アメリカ村は、真っ白なキャンパスに自分の好きな色で絵が描けるというのが面白かったですね。

でも、これからはアメリカ村は西海岸というよりも、ニューヨークみたいに、次から次へと新しいものを発信して生み出していけるフロンティア精神の人が入れ替わり立ち替わり入ってくる街になるともって育っていくと思います。バブルの頃を過ぎて最近また自分たちで何かをやろうという時代に入って、路地のところでやりかけてるのを見ると、ああ、この火はまだ消えてない、嬉しいなあと思いますね。



日限万里子 [ひぎりまりこ]

1969年、カフェ・ループをオープン。以後、レストラン&バー・パームス、ライブ、シーラカンスを経て、クラブQOOをプロデュース。アメリカ村の生みの親として、常に若者文化をリードしてきた。現在、空間プロデューサーとして(株)コンセルジュを設立。大阪を拠点に、都市文化の応援団として魂のある空間作りをプロデュースし続けている。

大塚 さっきおっしゃった、真っ白なキャンパスに絵を描くというのは僕もすごく感じたことなんです。それは大資本がまだ入ってなくて、店が小さかったせいもあるでしょう。

Tシャツ1枚に込められたもの

日限 その頃は冬場休んで、暖かいハワイやカリフォルニアに行つて、帰つてきて、春にまた店を開けられ



オープンエア・マーケット



現在のアメリカ村・ガレージを利用したマーケット



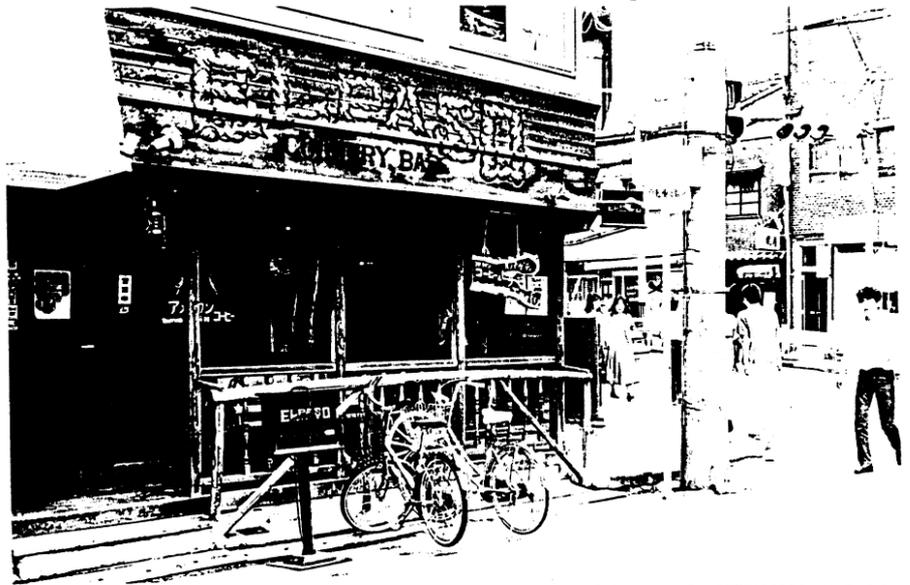
現在のエルパソ

る、それだけの家賃で借りれてた。だから遊びもあったし、またその店に来た若い子が、マスターからそういう話も聞ける。だからTシャツ一枚の価値観が、デパートで買うのとは全然違うんですね。音楽も新しいのが鳴っているとか、いろいろなものが空気と共にTシャツの一枚に込められている。

でも、だんだん家賃が高くなってきて、不本意なものでも売れるものなら売らないと家賃が払えへん、ということになってきて、アメリカ村が面白くなくなってきた。そこで三角公園をアメリカ村らしさで遊びましょうよ、って集めたのがアメリカ村ユニオン。だから商店街組合じゃないんですよ。

大塚 アメリカ村には土の匂いがしたんですよ。原宿には土の匂いはしませんよ。さっきも言った泉州地方の匂いがそのままずっときてるイメージがある。

日限 ロンドンに行って気付いたんだけど、日本と似ている。王室があって、パンクファッションがあって。日本も学歴社会で、みんな制服を着て並ばされて、能力があってもはみ出しもって言われて。アメリカは制服もないし、自由の国。アメリカ村は、パンクと一緒に、学校で勉強ができなくても能力のある人間が自由にチャレンジできる、フロンティア精神があるエリアなんですね。店員なんて雇えなかったから、経営者であり売り子だった。だからがんば



10年前のエルパソ。馬糞がきれいに見える。

れたし、冬の間は休みます、とか言って、開いていたり閉まっていたりというのがまた面白かったのかもしれないね。遊びながら仕事ができたっていうのが。

大塚 それはやはり70年代初期の全共闘世代の、ある種の自由の精神みたいなのを感じるんですよ。

日限 70年代というのはヒッピーが終わって、その頃から日本もだんだん自由になってきましたから。

大塚 アイビーの元祖・石津謙介の事務所は、もともと三角公園の近くにあった。アメリカ村初期の人々は、ハイティーン頃のアメリカ東海岸のアイビールックに惹きつけられていたが、年齢とともにアイビーに飽きたらなくなってきた。そこに西海岸の雰囲気フィットしたという部分があるでしょうね。

日限 それとVANジャケットの倒産が大きかったでしょうね。

大塚 この界限には、鴨居羊子をはじめ40軒ぐらいファッション関係の店があったのですが、僕は日限さんへの影響も大きかったと思うんですよ。

日限 当時のカフェに来る人たちの中には、音楽でも雑誌でも一番新鮮なものを海外から持って帰ってくる



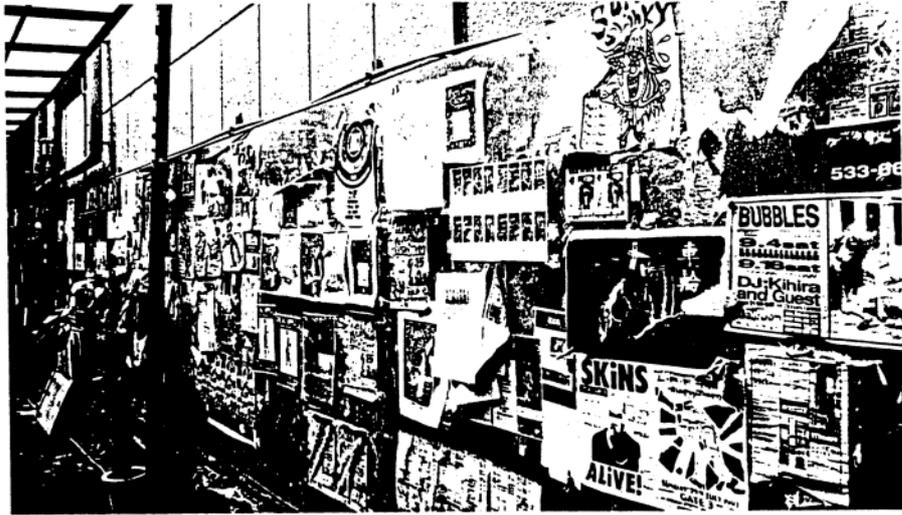
当時のアメリカ村マップ



大塚 融 [おおつかとおる]

1941年生まれ、東京都出身。

1964年一橋大学卒業、NHKに記者として入局。主として経済ネタを担当。1974年以来現在まで大阪に勤務。その間、1978年4月、アメリカ村をテレビニュースで初めて紹介、「アメリカ村ブーム」の引き金となる。現在、船場を中心に、家訓や社訓、また大富豪の持っていた数寄、風流の世界を研究。



人が多かった。クリエイターというのは新しいものを発表してゆく人たちですからね。

大塚 その頃店長クラスになる人はとんどが20代後半で、30代はいませんでしたね。僕はこれは5年持たないなと思った。というのは、結婚していないか、もしくは子供が小さいでしょう。ところが5年もすれば子供が小学校に上がる、そうするとセンスも変わるし、物の見方も変わる。コンサバティブになってきてね。案の定だめになってきた。

それからアメリカ村全体の評価の問題ですけど、僕は行政が乗り出したら絶対だめになると思う。どんな

商業空間でも盛り場でも、行政がそこを整備しようと言いだしたとたん、全部だめになりますよ。

日限 それと、あの頃からぼちぼちとまちづくりとか何とかいいだして、アメリカ村に対抗してヨーロッパ村とか。

大塚 ヨーロッパ村はBALができてからでしょう。カタカナのヨの字に似てるからっていうんでむりやりネーミングした。あそこはまったく人工的ですよ。

日限 ヨーロッパ村っていうのはビルを持ってるプロの人達がやっている。自然発生的に若い人が手作りで作ったアメリカ村と全然違うものだ

とっているんです。

器より人育て

大塚 ところで最近土地信託事業でビッグステップという巨大商業ビルができましたが、あれについてはどう評価されていますか。

日限 ビッグステップがオープンして初めての日曜日に、御堂筋から周防町を見た時にもものすごい人で、自分の中で、久しぶりに感激したんです。ああ、もう大丈夫って。アメリカ村は一時期十代の不良のたまり場みたいに言われていて、マリファナとかドラッグ事件があるたびに、またアメリカ村か、みたいな部分があって。ビッグステップができた時に、アメリカ村から育ってきた人たちが、今度は自分の子供の手を引いて来てるんですよ。お客さんの幅が広がったんだわと思うとほっとして。

大塚 僕なんかはビッグステップには全然魅力を感じないんですよ。日



左・ビッグステップ(写真/高橋裕嗣)
上・10年前。左手の塀が現在ビッグステップとなっている南小学校。

限さんみたいな中心になる人間がいなくて、建物に魂を感じないんです。日限 あそこは完全に寄り集まりですから。いろんな会社が一つのものとして作っているから、規制も強いし、枠の中にはまって理路整然と流れるだけですから問題はあるかもしれませんがね。

これからはアメリカ村でも、もっともっとやりたいことをチャレンジさせていって活性化させることと、もう一つ、マイナーな穴を一つあけておいてあげる。そこが空気穴になってどんどん新陳代謝してゆくのに、蓋をしちゃって組織で何かをすると、若者離れした時にどうするんだろうと思います。どこでも器ばかり作ってきたけど、器はもうええねん、中身は人やねん、人育てなあかんねんって、ずっと思ってるんです。

大塚 今あちこちで美術館や資料館を作っていますが、同じですね。美術館を運営する人間や、本当の絵描きを育てていない。今のアメリカ村でもそう。本質的に作りたいものを作らせるという、クリエイティブなところを誰かがしっかりと引っ張ってゆかないとだめだな、という気がするんです。

日限 それから日本ではマスコミの中心は東京ですから、ファッション

でも何でもモノ作りは大阪でしているはずなのに、みんな東京発になってしまう。そこはロンドンと似ている。ニューヨーク発になってしまうでしょう。ビートルズでも、ローリングストーンズでも、本当に定着しているものはロンドンなのに。大阪はファクトリー、モノ作りの原点みたいなところがあって、私に言わせると東京なんかモノを作っていないし、作り続けられない土壌なんです。大阪には親元があったり、仲間が助けたり、ということもあるし、東京の人間は根性がないけど、大阪の人間にはど根性がある。東京の人間は切

り花みたいに、枯れたら次のきれいな花を生けたらいいというところがある。でも関西の場合は食べれなくなってもちゃんとアーティストがやり続けている。

やっぱりヨーロッパ村でもないし、難波でもない、このアメリカ村からファッションでも流行でも生まれ続けてくると思いますね。

大塚 やはりアメリカ村から、まだまだ目が離せないですね。

今日は大変興味深いお話、ありがとうございました。

写真提供 現在のアメリカ村：長部太一
(神戸芸術工科大学環境デザイン学科田中直人研究室が行っている都市環境調査において撮影)
10年前のアメリカ村：森川秀典



三角公園いまむかし

